

擴張された倉敷天文臺

小 山 秋 雄

角帽を冠つた春の事である。琴座流星群の同時観測といふので故中村要氏が隊長格で、同級の柴田君と共に倉敷の原名譽臺長のお邸に3晩許り御厄介になつてゐた。京都では見られさうもない物凄く晴れ渡つた星空や、傍の中村さんがどしどし記録されてゐるのに拘らず、此方是一向流星が見えずに焦れつたくなつた事や、観測中庭石に足を滑らして腰をひどく打つた事、後樂園へ見物に行つたはいゝが、夜寝てゐないので眠くてベンチに晝寝してしまつた事等、今も記憶に残る所であるが、その時初めて當天文臺を訪れたので

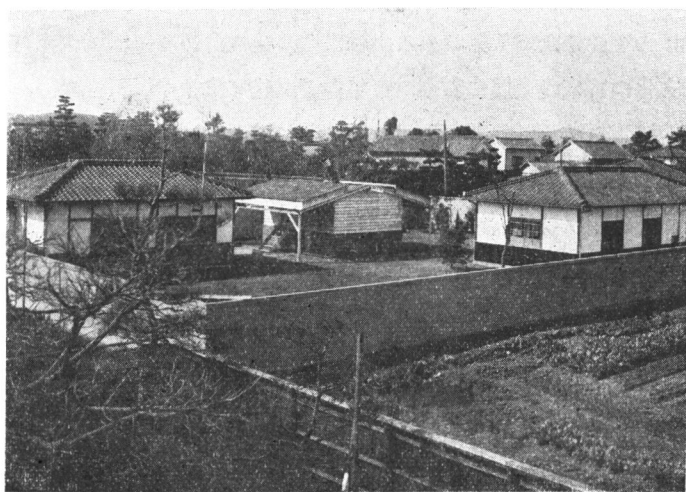


天文臺の正門

ある。畠の中に板塀に小さく囲まれて白く塗つた観測室が一つあり、その裏に水田があつたのをひどく妙に感じた。今から考へると1928年の事で、創立1周年を迎へた許りの時であつたのであるが、1昨年當地に赴任した時も矢張りそのまゝで、板塀等は大分いたんでゐた、兼々原澄治名誉臺長も氣に掛けて居られ、創立10周年記念の意味もあり遂に今回の擴張、増築となつたのである。工事は昨年12月9日板塀の取壊しに始まり、3月末名誉臺長の筆になる「東亞天文協會倉敷天文臺」の門標が掛けられて終了した。天文臺の北手に野

菜、草花、蓮根の畑のあつたのをつぶして地上げし、敷地を擴張した。その結果舊敷地の倍より少し大きくなり、それにモルタルの永久的な塀が圍られ、面目を一新した。表間の位置は以前のまゝであるが、東北隅に裏門が新に設けられた。此の擴張された敷地の一新に倉敷勞働科學研究所の農業勞働研究室に使つてゐた建物が、同研究所の東京移轉と共に不用になり、それが移されて來た。此れは1933年高松宮より勞研へ御下賜になつた有栖川厚生資金の一部に依つて同年5月に建てられたもので、木造平家の21坪のものである。

從來天文臺を見學に來て門前を知らずに行過ぎる者や、此れが有名な天文



〔天文臺の全景 右端の建物が新館〕

臺かと失望の口吻を洩らす者も無きにしもあらずであつたが、堂々たる正門ができてゐるから今後はかゝる心配もなくなり、又今迄年に數名といふ程度しか天文協會員の來訪はなかつたが、此からは天文臺を見失ふ事もなく安心して來ていただける。移轉新築された建物は4部室に分れ、陳列室、研究室、寫真用暗室、圖書兼應接室として使用される筈である。當天文臺の參觀者は年々3,400人あるが岡山縣内の中等學校、小學校、青年學校の生徒、農會員等が數に於て大部分を占め、創立以來地方青年層に對する科學知識、天

文思想の普及に大いなる貢獻をなしてゐるのは否み難い所である。而るに從來は切角熱心な參觀者に對して、手狭な觀測室内に小數の寫眞、表を掲げるに止まり遺憾の點が多かつたが今回陳列室を得、當天文臺の一つの大きな機能である地方文化の向上といふ事が充分遂行される様になつた譯である。研究室も今迄は宿舍兼用の舊館の一隅に同居の體であつたが、専用の一室ができ落着いて晝間の研究に従事できるようになつた。暗室は最も不便を感じてゐたもので、從來は晝間は農研の化學研究室の暗室を借用し、夜は研究室の一隅にハシリを作りそこで間に合せてゐた。それで新館ができるに當り暗室だけは充分以上の廣さをとり、簡単な光學實驗もできる程度にし、扉も二重にする等完備したものを作つた。今後優秀なカメラ・レンズの入手と共に寫眞觀測に力を注ぎたい次第である。圖書も今後機會ある毎に逐次充實し、我國天文文化の將來の發展に備へ、百年の計を建ててやつて行きたい。

今回の擴張の結果、外觀とか建物等に關しては一應完成し、今後は内容を充實し當天文臺の機能を十分に發揮して行きたい。小生が赴任以來滿2年を過ぎた。此の間反射望遠鏡の改裝、又此の度の豫期してゐなかつた擴張等名譽臺長の御心使い並々でない譯であるが、小生の不才、觀測材料は山積してゐるが、整理發表の仕事の捗らざるは誠にお恥しい次第である。

此の4月初に舊館より新裝なれる新館へ全部移轉した。まだ陳列室その他は整つてゐないが、塀際に植え込まれた緑の樹々は白いコンクリートと美しい對照をなしてゐる。クロバ1が構内を埋め盡すのも遠くはない。聽て觀測室の周りにすくすくと伸びた Cosmos に赤蜻蛉の息む候ともならう。(完)

ふふふ

ふふふ

ふふふ

ふふふふ

夜目遠目、見てもつくづく天文臺よ、なにか氣がかり秋の霧、

いつそ朝からアノ夜ふけまで、通ひつめましょ

リヤリヤンリヤ 星の數 ヨイト ヨイト ヨイト

(北原白秋作、倉敷天文臺の一節)

宇宙物理學教室の新入學生

磯村咄夫(四高出身) 石井靖丸(二高出身) 松原 茂(富山出身)